

お か つ は ら
岡津原Ⅲ遺跡

— 平成8年度市道富部各和線道路拡幅工事に伴う緊急発掘調査報告書 —

1997

掛川市教育委員会

例 言

1. 本書は、市道富部各和線改良工事に伴い、平成8年7月15日から平成9年3月31日まで実施した静岡県掛川市岡津597—1他に所在する岡津原Ⅲ遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、掛川市教育委員会の村松弘規が担当した。
3. 発掘作業ならびに整理作業には、次の方々の参加を得た。
大庭虎雄・本郷公太郎・長谷川勇次郎・鈴木はつ子・村松さと・宮崎充子・鈴木きん
豊田八重子・牧野すみ江
大川恵代・白石洋子
4. 本書の編集、執筆は村松が担当した。
5. 発掘調査の業務は、掛川市教育委員会教育長小松弥生、社会教育課長清水功、文化係長宮浦直己のもとに社会教育課が所管した。
6. 調査によって得た資料は、すべて掛川市教育委員会が保管している。

凡 例

1. 挿図における方位は、磁北を示す。
2. 本書で使用した遺構名称は次のとおりである。
SD：溝状遺構 SX：意味不明遺構

目 次

例言・凡例

I 発掘調査と遺跡の概要	2
1. 調査に至る経緯と調査の目的	
2. 調査の方法と経過	
3. 遺跡をめぐる環境	
II 調査の内容	6
III まとめ	13

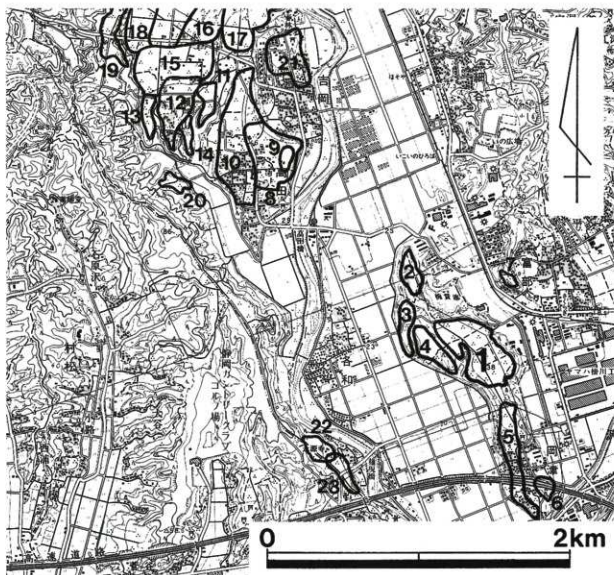
報告書抄録

挿 図 目 次

第1図	遺跡の位置及び周辺遺跡分布図	1
第2図	遺跡周辺地形図	4
第3図	グリット配置図及び遺構全体図	5
第4図	S X 01、S D 01・02・03実測図	7
第5図	S D 04・05実測図	8
第6図	S D 06・07・08・09実測図	9
第7図	S D 10・11・14実測図	10
第8図	S D 12・13実測図	11
第9図	方形周溝墓群構成図	13

図 版 目 次

図版 I	第1区完掘状況（北西から）
図版 II	第1区完掘状況（南東から）
図版 III	(上) 第1区調査前全景（南東から） (中) 第2区調査前全景（北西から） (下) 重機稼働風景
図版 IV	(上) S X 01完掘状況（北から） (中) S D 02完掘状況（北から） (下) S D 03完掘状況（北から）
図版 V	S D 05・06完掘状況（南東から）
図版 VI	S D 08・09・10完掘状況（北西から）
図版 VII	S D 13完掘状況（南東から）



1	岡津原Ⅲ	縄文(中)、弥生(中)～古墳(前)	13	瀬戸山Ⅱ	縄文(早・中・晩)、弥生(中・後)～古墳(前)
2	岡津原Ⅰ	縄文(中)、弥生(中・後)	14	瀬戸山Ⅲ	弥生(後)～古墳(前)
3	岡津原Ⅱ	縄文(中)	15	吉岡原	縄文(中・晩)、弥生(後)～古墳(前)
4	岡津原Ⅳ	弥生(中)～古墳(前)	16	高田上ノ段	弥生(後)～古墳(中)
5	岡津原Ⅴ	古墳(中・後)	17	高田下ノ段	縄文(中・晩)、弥生(後)～古墳(後)、平安
6	向山	縄文(早)、弥生(中)	18	溝ノ口	縄文(中)、弥生(後)～古墳(前)
7	二反田	弥生(中)	19	今坂	弥生(後)～古墳(前)
8	女高Ⅰ	弥生(中)～古墳(前)	20	平田ヶ谷	縄文(中)、弥生(後)～古墳(前)
9	女高Ⅱ	縄文(晩)、弥生(後)～古墳(前)、奈良、平安	21	林	弥生(後)～古墳(前)、中世
10	高田	縄文(中)、弥生(後)～古墳(中)	22	松ヶ谷	弥生(後)
11	花ノ腰	弥生(後)～古墳(前)	23	山下	弥生(中)
12	瀬戸山Ⅰ	縄文(早・中)、弥生(後)～古墳(前)			

第1図 遺跡の位置及び周辺遺跡分布図

I 発掘調査と遺跡の概要

1. 調査に至る経緯と調査の目的

岡津原Ⅲ遺跡が所在する岡津原は、原野谷川の左岸に形成された独立した河岸段丘で、東西500m、南北2kmの広さを測る。段丘面には縄文時代から古墳時代にかけての遺跡群が広がっている。現在は段丘南端部に集落があり、段丘上は茶畑となっている。

市道富部各和線は、掛川市富部から岡津原を越えて掛川市各和に通じる道路である。道幅が狭い割には車両の通行量が多く、平成7年3月までは路線バスが運行されていた。そこで、拡幅工事が平成2年度より各和側から開始され、丘陵の東縁辺部まで終了した。今回の拡幅地点は、切り通しで見通しが悪く、坂道の途中がカーブとなっている危険な場所である。そのため、全線の拡幅工事完成が急務であった。

今回の調査は、平成3年度の発掘調査地点の続きであり、拡幅工事による遺跡の消滅が免れないことから、事前発掘調査として、掛川市教育委員会が実施することになった。

2. 調査の方法と経過

今回の調査は、発掘区域のほぼ中央に段差があるため、そこを境にして西側を第1区、東側を第2区と呼ぶことにした。調査区の区画は、第2区では遺構が確認されなかったので、第1区の長軸方向を基準線として任意に1辺5m四方に設定した。設定した区画の東西線は、N-67°45'00"-Eである。

第2区は地元の人の話によると、調査地点の近くを通る旧国鉄二俣線（現・天竜浜名湖鉄道線）敷設工事の際に大きく土取りされたらしい。その箇所もかつては段丘面が広がっていたことが周辺地形の観察から想像できる。また、道路部分も切り通しになっていることから段丘面が存在していたと思われる。

調査は、まず、重機による茶樹の抜根、耕作土の除去を行った。続いて人力による遺構の掘削作業を行った。遺構の検出・遺物の取り上げ・図面作成は、設定した区画に従った。また、区画を設定した杭を国家座標に拾い出す基準点測量とベンチマークを設定するための水準点測量を業者に委託した。実測作業は、遺構全体図については20分の1縮尺、遺構断面図については10分の1縮尺で作成した。写真による記録は、ブローニーサイズ(6×7)原画白黒、35mmサイズ原画白黒、同リバーサル撮影によった。

調査の経過は、以下のとおりである。

平成8年7月15日～7月22日	重機による茶樹抜根、耕作土の除去
7月18日～7月29日	人力による粗掘・遺構確認・遺構掘削・図面作成
7月30日～8月7日	完掘遺構写真撮影・完掘遺構実測・発掘器材の片付
8月26日	基準点測量及び水準点測量

3. 遺跡をめぐる環境

平成8年度は、掛川市役所新庁舎での業務が開始され、掛川城天守閣入館者が100万人に達成するなど記念すべき年になった。また、小笠山運動公園や第2東名高速道路の建設などの大規模な開発行為が進行中である。しかし、今回の調査地点の岡津原や原野谷川右岸の和田岡原には鮮やかな緑の茶畑が広がり、緑茶生産量日本一を誇る掛川茶の生産地となっている。

ここで岡津原を中心に発掘調査の成果を示しておく。

1930年の「旧静岡県史」に画文帯神獣鏡が出土した古墳時代中期の岡津奥の原古墳が紹介されている。現在は消滅しており、位置、規模ともに不詳である。

昭和41年から42年には、丘陵南端部の岡津横穴群A・B群、向山古墳群1・2号墳、西岡津古墳が調査された。これは東名高速道路建設に伴うものである。岡津横穴群A群は8基、B群は16基で構成され、須恵器、土師器、直刀、鉄鏃、耳環、人骨等が出土した。両群とも古墳時代後期と考えられる。向山古墳群は古墳時代後期の円墳4基で構成され、1号墳からは鉄鏃、2号墳からは鉄鏃、銅鏡等が出土した。古墳時代後期の西岡津古墳は、変形獣文鏡、鹿角装刀子等が出土した。これらは工事によって既に消滅したが、段丘上には神明塚古墳や八幡平古墳群等が現存している。

平成3年度には、今回の調査地点の西側が道路拡幅に伴い調査された。弥生時代中期の方形周溝墓4基とそれに伴う溝7条、弥生時代中期後葉から後期の方形周溝墓の可能性のある溝を9条検出した。この中には、V字状の断面をした環濠の可能性のある溝も含まれている。また、縄文時代中期の土器片がピットから出土した。

平成5年度には、段丘南端部の向山遺跡地内で工場建設に伴い調査が行われた。弥生時代中期から後期の方形周溝墓3基に伴う溝9条とその他の溝34条を検出した。また、時期不明の掘立柱建物8棟を含む柱穴状遺構が46基、近世の土壌墓等が検出された。なお、向山遺跡からは縄文時代早期の押型土器が確認されている。

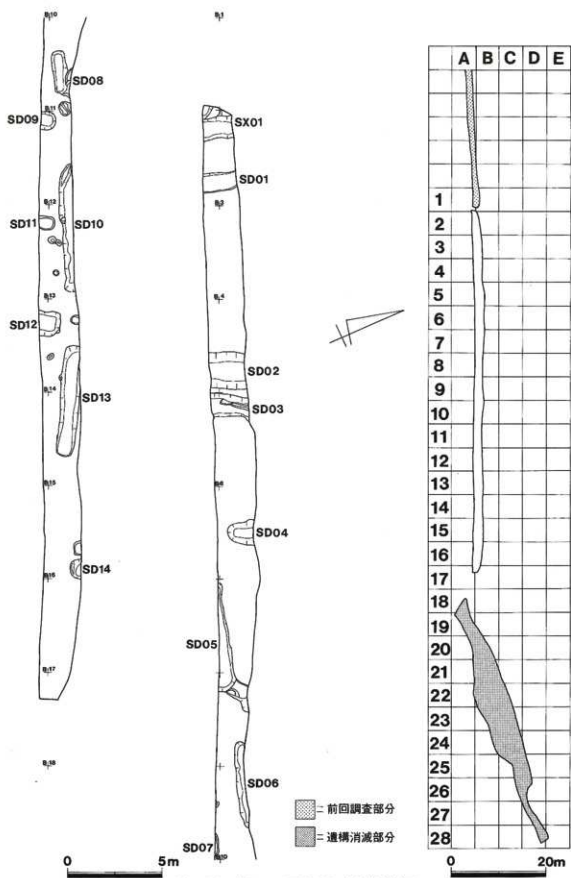
岡津原周辺の調査例では、和田岡原南端部の山下遺跡において、弥生時代中期から後期の方形周溝墓が、昭和58年度と平成6年度に実施した発掘調査で合計27基検出されている。

以上がこれまでに実施された発掘調査の成果である。これらのことから歴史的環境を述べるのは難しいが、岡津原には縄文時代早期から古墳時代後期にかけての遺跡が存在し、段丘縁辺部及び南端部周辺に方形周溝墓や古墳、横穴等の墳墓が構築された。今回の調査でも方形周溝墓と思われる溝が検出された。これらに伴う集落跡は未だ検出されていないが、おそらく調査の行われていない段丘中心部に営まれていたであろうと思われる。今のところ、岡津原における発掘調査の件数は和田岡原での調査例よりも少なく、全体を解明するには今後の調査例の増加を待つしかない。

- (1) 掛川市教育委員会 『掛川市遺跡分布調査報告 I』 1984
- (2) 掛川市教育委員会・袋井市教育委員会 『山下遺跡緊急発掘調査報告書』 1984
- (3) 掛川市教育委員会 『岡津原Ⅲ遺跡発掘調査報告書』 1992
- (4) 掛川市教育委員会 他 『静岡県掛川市向山遺跡発掘調査の記録』 1994
- (5) 掛川市教育委員会 『平成7年度出土文化財展パンフレット』 1995



第2図 遺跡周辺地形図



第3図 グリッド配置図及び遺構全体図

II 調査の内容

今回の調査では、溝状遺構14条（方形周溝墓に伴う溝10条を含む）、小穴、意味不明遺構を検出した。遺構から出土した土器は数が極めて少ない上に小片で、図化に耐えるものがなかった。以下、溝状遺構を中心に説明する。

S X 01（第4図）

A・B—1・2区で検出した。調査区と直交する溝とそれを切る別の遺構から構成される。別の遺構は、前回調査区の東壁面で検出された遺構と同一と考えられる。溝の検出幅は120cm、深さは50cm、別の遺構は検出幅は50cm、深さ10cmを測る。溝の断面はやや急な立ち上がりを呈する。遺物は出土しなかった。

S D 01（第4図）

A・B—2区で検出した。幅100cm、深さは最深部で13cm、北端に向かって浅くなる。断面はやや急な立ち上がりを呈する。S X 01の溝との間隔は1.7mを測る。土器は小片が出土した。

S D 02（第4図）

A・B—4区で検出した。幅200cm、深さは50cmを測る。断面は緩やかなU字状を呈する。S D 01との間隔は8.5mを測る。土器は小片が出土した。

S D 03（第4図）

A・B—4・5区で検出した。幅175cm、深さは最深部で40cmを測る。断面は西側の立ち上がりは緩やかだが、東側は急である。S D 02との間隔は0.3mを測る。土器は小片が出土した。S X 01の溝及びS D 01からS D 03はいずれも調査区と直交し、ほぼ平行である。

S D 04（第5図）

B—6区で検出した。北側調査区外へ伸びる。幅140cm、深さは60cmを測る。断面はやや急な立ち上がりを呈する。土器は小片が出土した。

S D 05（第5図）

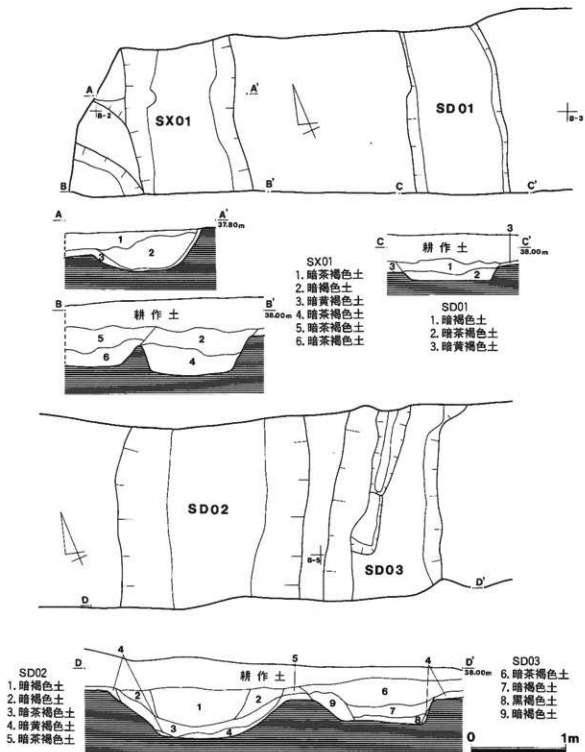
B—7区で検出した。溝の中心は調査区の南側になる。長さ460cm（推定）、深さは35cmを測る。断面はやや急なU字状を呈する。S D 04との間隔は2.5mを測る。土器は出土しなかった。

S D 06（第6図）

B—8・9区で検出した。溝の中心は調査区の北側になる。長さ580cm（推定）、断面はやや急な立ち上がりを呈する。S D 05とほぼ同一方向であり、間隔は2.7mを測る。土器は小片が出土した。

S D 07（第6図）

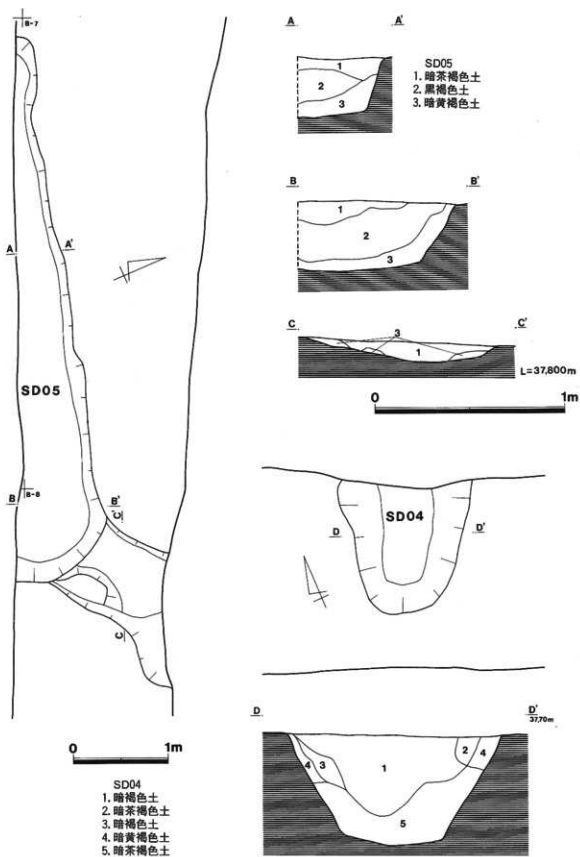
A—9区でわずかに検出した。検出幅は125cmを測る。S D 06との間隔は1.5mを測る。断面の立ち上がりは東側は急峻で、西側は緩やかである。土器は小片が出土した。



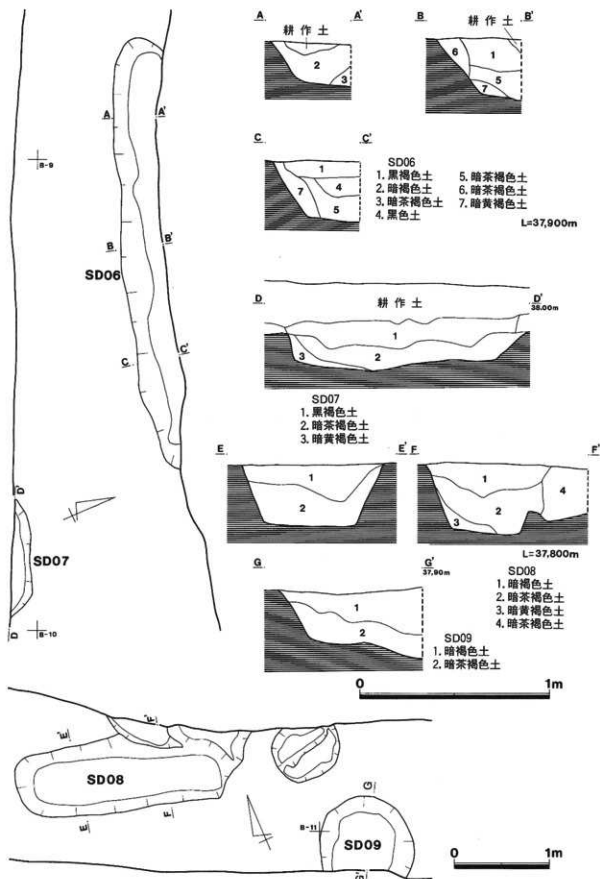
第4図 SX01、SD01・02・03実測図

SD08 (第6図)

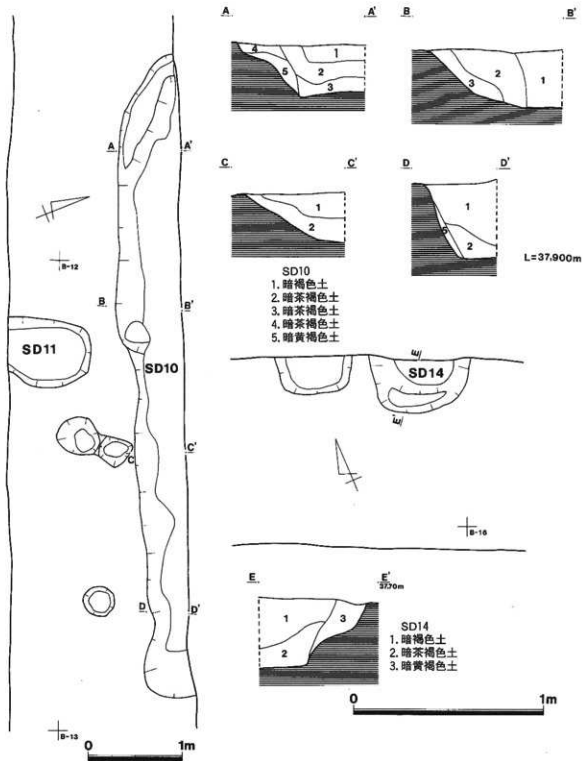
B-10区で検出した。検出した長さは240cm、幅85cm、深さ35cmで、北側を別の遺構によって切られている。断面は急な立ち上がりを呈する。土器は小片が出土した。



第5图 SD04·05实测图



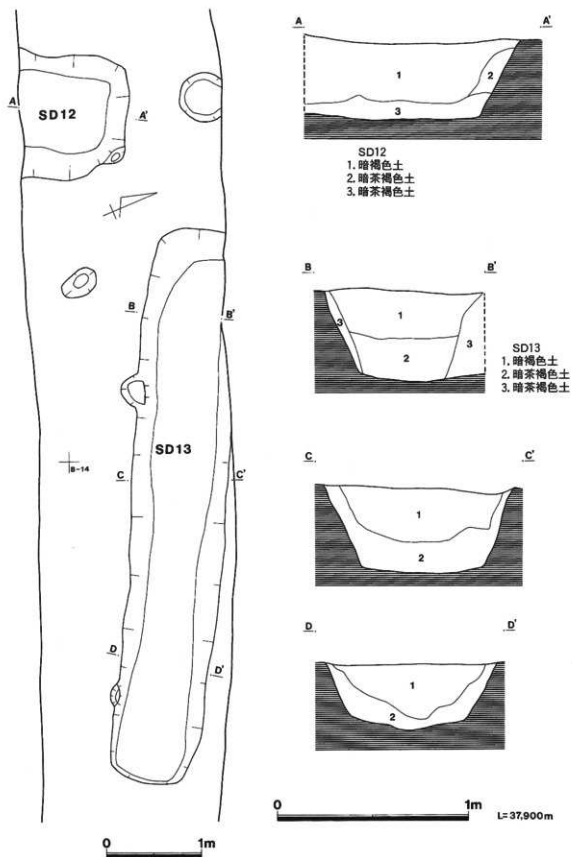
第 6 图 SD06·07·08·09 实测图



第7図 SD10・11・14実測図

SD09 (第6図)

A・B-11区で検出した。調査区南側に延びる。検出した幅は100cm、深さは40cmを測る。断面はやや急な立ち上りを呈する。SD08との間隔は1.1mを測る。遺物は土器の小片が出土した。



第8图 SD12-13实测图

SD10 (第7図)

B-11・12区で検出した。調査区北側へ延びる。長さは680cmを測る。断面は西端では緩やかだが、東端は急な立ち上がりを呈する。SD09との間隔は2.0mを測る。土器は小片が出土した。

SD11 (第7図)

A・B-12区で検出した。調査区南側へ延びる。幅70cm、深さ12cmを測る。土器は出土しなかった。

SD12 (第8図)

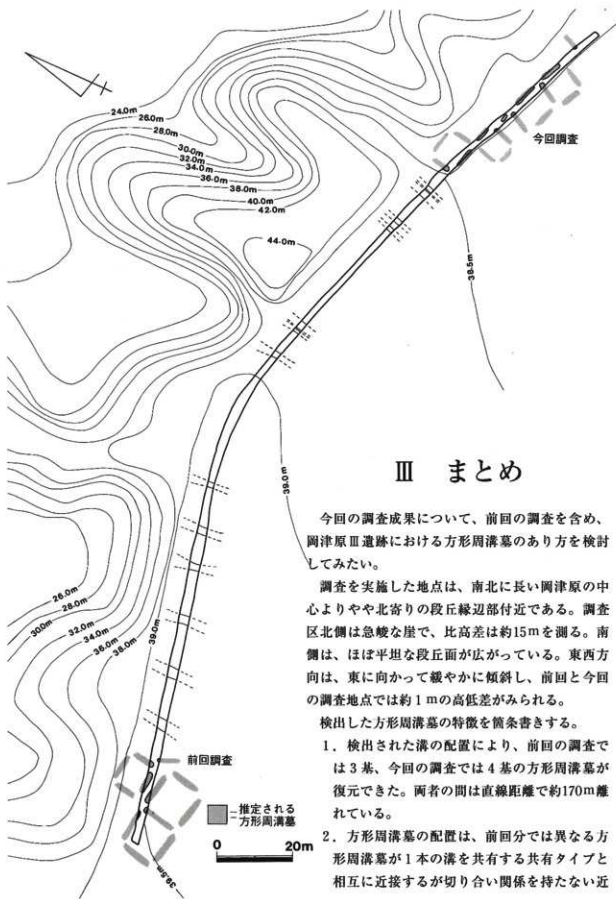
A・B-13区で検出した。南側調査区外へ延びる。幅140cm、深さ42cmを測る。SD10との間隔は1.2mを測る。土器は小片が出土した。

SD13 (第8図)

B-13・14区で検出した。長さは600cm、幅100cm、深さは最深度で50cm、東側に向かって浅くなり25cmを測る。断面はやや急だが東側に向かって緩やかになる。SD12との間隔は1.0mを測る。土器は小片が出土した。

SD14 (第7図)

B-15区で検出した。調査区北側へ延びる。幅110cm、深さ40cmを測る。断面は途中で平場があるが、立ち上がりは急である。土器は小片が出土した。



Ⅲ まとめ

今回の調査成果について、前回の調査を含め、岡津原Ⅲ遺跡における方形周溝墓のあり方を検討してみたい。

調査を実施した地点は、南北に長い岡津原の中心よりやや北寄りの段丘縁辺部付近である。調査区北側は急峻な崖で、比高差は約15mを測る。南側は、ほぼ平坦な段丘面が広がっている。東西方向は、東に向かって緩やかに傾斜し、前回と今回の調査地点では約1mの高低差がみられる。

検出した方形周溝墓の特徴を箇条書きする。

1. 検出された溝の配置により、前回の調査では3基、今回の調査では4基の方形周溝墓が復元できた。両者の間は直線距離で約170m離れている。
2. 方形周溝墓の配置は、前回分では異なる方形周溝墓が1本の溝を共有する共有タイプと相互に近接するが切り合い関係を持たない近

第9図 方形周溝墓群構成図

接タイプが見られる。今回分では共有タイプと思われる配置がうかがえる。

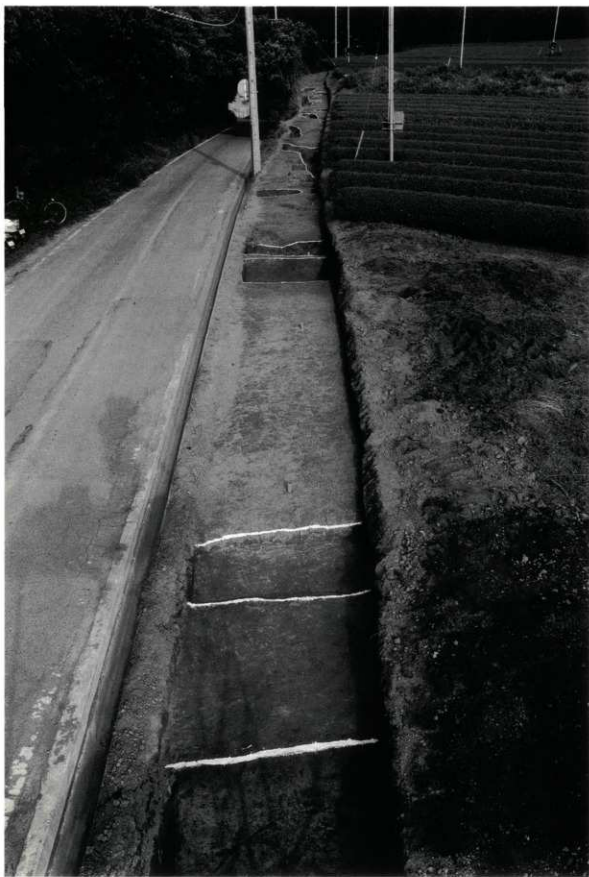
3. 今回分の方形周溝墓の年代は、出土した土器が小片であるため時期の決定ができなかった。前回分では、弥生時代中期後葉の白岩式土器が出土している。
4. 前回分では、環濠の可能性のある断面形状がV字状を呈した溝や、幅2 m以上の溝が検出された。これらは調査区を直交し、形状や規模から方形周溝墓の溝とは異なるものであると推測される。今回も前回同様、調査区を直交する溝が検出されたが、検出した長さがわずかであるため、溝の性格を特定することはできない。

以上のことをふまえて、平面形態と配置について静岡県内の弥生時代中期の方形周溝墓と比較してみたい。県内の中期の方形周溝墓の平面形態は四隅が切れるタイプが一般的である。なお、後期になると溝が全周する。配置は、共有タイプが多く、その特徴は同規模の方形周溝墓が同一方向に並ぶということが指摘されている。この特徴を顕著に示しているのが、掛川市と袋井市にまたがる中期中葉の山下遺跡の検出例である。

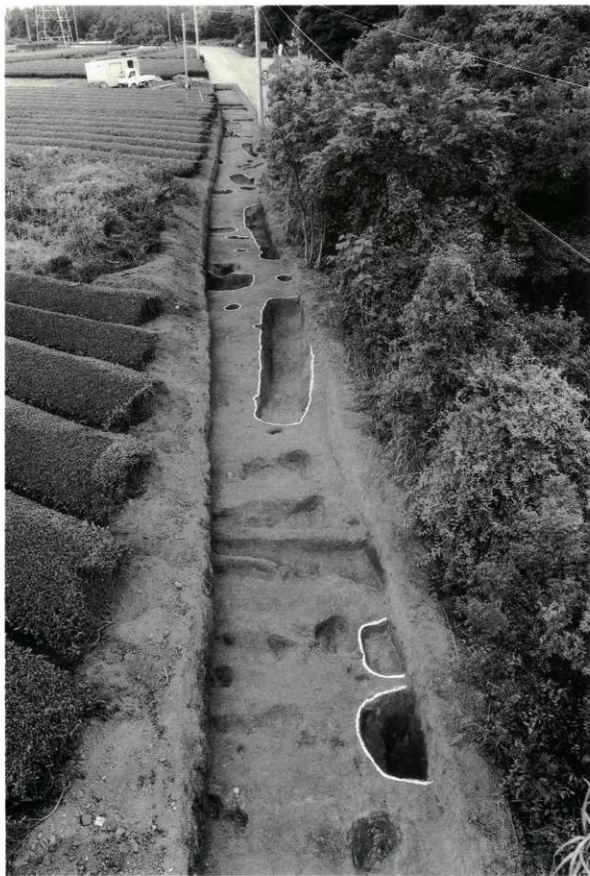
今回分の方形周溝墓の平面形態と配置をみると、中期の特徴があてはまるのではないと思われる。さらに、今回の方形周溝墓の時期について、検出範囲内で想定される平面形態・規模が、前回中期後葉の土器が出土した方形周溝墓と類似することから、前回分と同時期に造墓された可能性がある。しかし、両地点を合わせた1つの大規模な方形周溝墓群としてとらえるには、その間を結びつける方形周溝墓を確認できなかった。そのため、山下遺跡などと異なり、岡津原Ⅲ遺跡では、小規模な方形周溝墓群が複数存在していたのではないだろうか。

今回の調査も道路の拡幅部分のみのわずかな範囲を発掘調査したにすぎなかったが、前回同様、弥生時代の方形周溝墓が検出された。「遺跡をめぐる環境」でも述べたように、岡津原での発掘調査例は数少なく、岡津原の歴史を解明する資料は乏しい。しかし、そのことは開発などによってまだ消滅していない遺跡が多く残されているということでもある。

圖 版



第1区完掘状況（北西から）



第1区完掘状況（南東から）



第1区調査前全景（南東から）



第2区調査前全景（北西から）



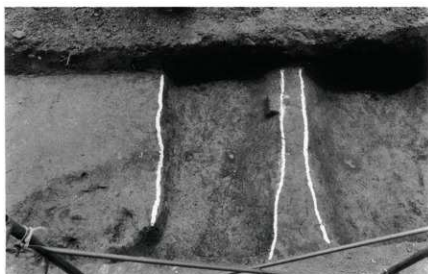
重機稼働風景



SX01完掘状況（北から）



SX02完掘状況（北から）



SX03完掘状況（北から）



SD05-06完掘状況（南東から）



SD08・09・10完掘状況（北西から）



SD13発掘状況（南東から）

報告書抄録

ふりがな	おかつはらさんいせき							
書名	岡津原Ⅲ遺跡							
副書名	平成8年度市道富部各和線道路拡幅工事に伴う緊急発掘調査報告書							
編著者名	村松弘規							
編集機関	掛川市教育委員会							
所在地	〒436 静岡県掛川市長谷701番地の1 TEL (0537)21-1158							
発行年月日	西暦 1997年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	所在地	コ ー ド		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査因
		市町村	遺跡番号					
おかつはらさんいせき 岡津原Ⅲ遺跡	しずおかけんおかけがわし 静岡県掛川市 おかつ 岡津591-1他	22213	110-3	34度 46分 29秒	135度 58分 08秒	19960715 ～ 19970331	491㎡	道路 拡幅
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
岡津原Ⅲ遺跡	散布地	弥生時代	溝状遺構 14条 (方形周溝墓に 伴う溝10条) 穴状遺構	弥生土器片				

岡 津 原 Ⅲ 遺 跡

発掘調査報告書

1997年3月31日

掛川市教育委員会

編集発行 掛川市長谷701番地の1
TEL (0537) 21-1158

株式会社 彩光堂

印 刷 掛川市宮脇248番地の1
TEL (0537) 24-0013

